

新渡戸稲造の農政思想と『武士道』

清水徹朗（農林中金総合研究所）

1. はじめに

新渡戸稲造は、①農学、②植民政策論、③英語での日本紹介、④教育者、⑤国際連盟事務次長など多分野で活躍し、近代日本の形成において非常に重要な役割を果たした。経済学史においても重要であり、『農業本論』は河上肇や柳田国男に影響を与え、その植民政策論は矢内原忠雄の帝国主義研究や国際経済論の出発点になった。また、現在東大図書館が所蔵するアダム・スミス文庫は、新渡戸がロンドンの古書店で入手し東大に寄贈したものである。

新渡戸稲造は『武士道』の著者としてよく知られており、現在も武士道に関する著作・論文が多く書かれているが、『農業本論』は内容の難解さもあって今日ではあまり読まれておらず研究も少ない。本報告では、新渡戸がなぜほぼ同時期に異質とも思われる『農業本論』と『武士道』を書いたのかを考察するとともに、新渡戸稲造の現代的評価を考えてみたい。

2. 新渡戸稲造の生涯

新渡戸稲造（1862－1933）は幕末の1862年に岩手県盛岡市で生まれた。祖父傳は青森県三本木地域の開拓を行った人物であり、父十次郎も共に開拓事業に従事した^(注1)。しかし、稲造が5歳の時に父が死去したため、9歳の時に叔父太田時敏を頼って上京し、6年間東京で暮らした。東京では英学校で英語を学び、77年（15歳）に設立されたばかりの札幌農学校に第2期生として入学し、同時期に入学した内村鑑三とともにキリスト教徒になった。

札幌農学校卒業後、開拓使に一時勤務したあと83年に東京大学に入学したが、講義内容に失望してわずか1年で退学し、米国ジョンズ・ホプキンス大学に留学して政治学、歴史学、文学を学んだ（3年間）。その後、ドイツに渡り、ボン大学、ベルリン大学、ハレ大学で農業経済学、統計学を学び、90年に「日本土地制度論」（ドイツ語）を執筆した。

7年の留学の後、91年に札幌農学校教授に就任し、米国女性メアリー・エルキントンと結婚した。98年に『農業本論』、『農業発達史』を書き、また1900年に『武士道 (Bushido - The Soul of Japan)』を米国で出版した。01年からは台湾総督府で糖業振興の仕事に従事し、04年に台湾での経験を生かして京都帝国大学で植民政策の講義を行った。06年に第一高等学校校長に就任し、07年に東京帝国大学農科大学教授、09年に法科大学教授に就任した。また、18年に東京女子大学の初代学長となり、女子教育の確立に貢献した。

さらに、20年から26年まで国際連盟事務次長に就任し、29年には太平洋問題調査会理事長になったが、日本が軍国主義体制に突入しつつあった33年に死去した。

3. 『農業本論』の主要内容

『農業本論』は、新渡戸が札幌農学校とドイツで学び研究したことの集大成であり、農学原論、農政序説ともいうべき著作である。日本には江戸期にも農書や農政学の著作はあり、明治期になって外国人による日本農業に関する著作(フェスカ、エゲルト、マレット)や翻訳書が出版されたが、『農業本論』は日本人によって書かれた初めての体系的な農学の著作であった。

『農業本論』は、農業、農学の定義と範囲を書いた前半部（1～4章）と、農業の政治経済・社会における役割について論じた後半部（5～10章）に分けられる。

1章「農の定義」では、日本語、中国語、ギリシャ語、ラテン語、英語など世界の様々な言語で「農」がどう表わされているかを子細に検討し、2章「農学の範囲」では、農学と生物学、理化学、経済学、医学等との関係について考察し、農学は総合的学問であることを指摘している。3章「農業における学理の応用」では、カント、スミス、ミル、ベーコン、ニュートン、ダーウィン、リービヒなど欧州の哲学者、経済学者、科学者を引用して学問と実業との関係、農学の特色を論じ、4章「農業の分類」では、農業には様々な種類（集約農業、粗放農業、大農、小農、小作農、自作農、熱帯農業等）があるとし、その分類方法を紹介している。

5章「農業と国民の衛生」では、農業が健康を養うことを寿命、疾病、出生等の統計で検証し、6章「農業と人口」では、人口と食料の関係について孟子、スミス、マルサスの見解を紹介し、都会と田舎の関係に関する統計を示している。7章「農業と風俗人情」は、カーライル、ラスキン、トルストイなどを引用して農民の精神、心理、道徳について論じ、8章「農民と政治思想」では、農民と政治の関係について考察し、農民が保守的であることを指摘している。9章「農業と地文」では、農業が地形や生態系に与える影響を解説し、最後に10章「農業の貴重なる所以」では、農業は国の基礎であるとし、農業が重要である理由を列挙している。

このように『農業本論』は農業、農学に関して様々な視点から論じた大著であり、当時多くの読者を得たが、戦後も76年に明治大正農政経済名著集の一巻として再刊された。

4. 河上肇と柳田国男への影響

『農業本論』は、その後の農政学、農業経済学の発展に大きな影響を与えたが、特に河上肇と柳田国男への影響が重要である。

(1) 河上肇の農政学

河上肇（1879～1946）は戦前の日本で最も影響力のあったマルクス経済学者であるが、東京帝国大学（法科大学）で松崎蔵之助から農政学を学び、05年に『日本尊農論』、06年に『日本農政学』を書いている。両書とも『農業本論』の影響を強く受ける一方で批判もしており、新渡戸を乗り越えようという強い意欲で書かれた本であった。『日本尊農論』では、『農業本論』は農業が貴重だという当然のことが書いているだけだとし、「第1章 経済上に於ける農業保全の利益」で、農業と商工業の関係を論じて国際分業論を批判し、また「第2章 経済上以外より見たる農業保全の利益」として軍事上と人口増殖をあげ、さらに国家の興亡と農業保全の関係を論じている。一方、『日本農政学』は農業政策に関して包括的に論じた著書であり、農工商の併進鼎立論を主張し、中小農の自立のための農業政策（耕地整理、金融、関税、産業組合奨励等）について詳しく解説している。

なお、河上肇は当初より農政学とともに経済学の研究も行っており、05年に『経済学上之根本概念』、『経済学原理（上）』を執筆した。また、06年には「社会主義評論」の新聞連載を行い、ドイツに留学（15年）し『貧乏物語』（16年）を発表して以降は、マルクス経済学の研究

に専念し農政学からは離れていった。

(2) 地方学と柳田国男

柳田国男（1875～1962）は、河上と同じく東京帝国大学で松崎蔵之助から農政学を学んだ。大学卒業後すぐに農商務省に就職して産業組合の普及の仕事を行い、02年に『最新産業組合通解』を執筆した。また、02年から05年まで早稲田大学で農政学の講義を行って講義録『農政学』を出版し、07年に『農業政策学』、10年に『時代と農政』を刊行したが、『遠野物語』（10年）以降は農政学から離れ民俗学の研究に専念した。

柳田国男は、ドイツ社会政策学派（ワグナー等）の影響を受けるとともにイギリス経済学（ミル等）の影響もあり、小農保護論や報徳社を批判するなど合理主義者としての面も有していた。新渡戸とも親しく、新渡戸が提唱した「地方学」（『農業本論』第6章）の影響を受け、石黒忠篤らとともに「郷土会」という研究会を立ち上げた。

5. 「農業経済学」のその後の展開

駒場農学校の第1期生で当時の農学会の中心的存在であった横井時敬（1860 - 1927）は、『農業本論』は総花的だと批判したが、横井自身の農業経済学は新渡戸ほどの視野の広さはなかった^(注2)。農政学における新渡戸の継承者は那須皓（1888 - 1984）であり、那須は『農村問題と社会理想』（1924）で文明、社会理想という視点から当時の農業問題を論じた。しかし、那須は戦時中に石黒忠篤や加藤完治らとともに満州開拓に協力したこともあり、戦後は批判され、その著書が読まれることはほとんどなくなった。

日本の「農業経済学」は、近藤康男と東畑精一という二人の農業経済学者によって確立したと言われている。近藤康男（1899 - 2005）は、ドイツの農学者チューネンの研究を行った後、マルクス経済学の視点から日本農業を分析し（『農業経済論』1932）、戦後も大きな影響力を与え続けた。一方、東畑精一（1899 - 1983）は、中山伊知郎とともにシュンペーターのもとで学び、『経済発展の理論』を日本農業の分析に適用した『日本農業の展開過程』（1937）を書き、その後、日本の近代経済学の形成・発展に大きく寄与した。

戦後は、「マルクス経済学」と「近代経済学」の二大流派が農業経済学にも見られ、マルクス経済学者（大内力、山田盛太郎、井上晴丸、大島清等）がマルクス、レーニン、カウツキーなどの古典に依拠して農民層分解論や地代論の研究を行う一方で、計量経済学、数理経済学的手法による日本農業分析も盛んに行われた（大川一司、速水佑次郎、土屋圭造等）。こうしたなかで、新渡戸の『農業本論』は、農本主義や農政思想史の研究者に関心が持たれたのみで^(注3)、読まれない本となった。

6. 『武士道』の倫理思想

『武士道』は1900年に米国で出版され、08年に邦訳された。新渡戸が『武士道』を執筆したのは、ベルギーの法学者から「日本に宗教教育がないとすると道德教育がないのか」と問われたことが契機になり、また妻に日本の習慣の理由を説明するためであったという。

『武士道』の内容は、以下の通りである。

武士道は、西欧の騎士道（chivalry）に似て文字には表現されない道德体系であり、その根源は仏教、神道、儒教で、生に執着せず死に親しむ心や禅の思想を仏教から、祖先への崇拜、君臣への忠誠心と愛国心を神道から、父子、夫婦、兄弟、朋友の関係を儒教から受け継いでいる。そして、義（正義心、義理）、勇氣（勇敢）、仁（愛情、慈悲）、礼（礼儀作法）、信・誠（正直）、名誉（廉恥心）、忠義（忠誠、誠実）、克己（忍耐）など武士道の道德的内容を様々な歴史的な事象や西洋の哲学をまじえて解説し、武士の教育、切腹・敵討の論理、刀（武士のシンボル）について説明している。

さらに、武家の女性の教育と地位について触れた後、芝居、寄席、講談を通じて武士道が民衆に広まり、武士道は全民衆の道德的基盤になったとし、武士道が近代日本の原動力になったことを吉田松陰、西郷隆盛、大久保利通等の人物を挙げて説明している。一方で、日本の欠点は武士道にも責任があるとし、最終章「武士道の未来」では、産業社会の発展によって武士道は衰退していくと認めつつも、功利主義や唯物主義に対抗できる思想として武士道はキリスト教と共通するものがあり、「武士道の光と栄光は長く生き延びる」と結んでいる。

新渡戸が指摘したように、日本の倫理思想において神道、仏教、儒教が大きな役割を果たしたのは事実である（和辻哲郎『日本倫理思想史』1952）。幕藩体制下で、藩校において武士階級の子弟に儒学を教えるとともに、庶民まで儒教的道德を浸透させようとしたし、一般庶民は寺子屋で学び、寺や神社が農村における重要な教育の場であった。また、江戸期に商人、農業を論じた思想家が現われ、特に二宮尊徳の報徳思想は明治期の道德観形成に大きな影響を与えたが、尊徳の思想も「神仏儒」から生み出されたものであった。

新渡戸は『農業本論』で農民の道德観念（正義心、宗教心、愛国心等）を論じており、その後、『修養』などの著書でわかりやすく道德や人生哲学を説いた。こうした新渡戸の言説を見ると、『武士道』は単に武士階級の倫理を解説した本ではなく、武士道に代表される日本の道德・倫理思想を論じ、それを欧米社会に知らせるとともに、日本人の道德心の向上を願って書いた本であったと考えられる。

しかし、新渡戸の説いた武士道は新渡戸流の解釈であり、文献的な裏付けが不十分で本来の武士道とは異なるとの批判を受けた^(注4)。そして、『武士道』出版当時東京大学学長であった井上哲次郎は、新渡戸の誤りを正さなければならないとして05年に『武士道叢書』を編集し、山鹿素行、中江藤樹、吉田松陰など江戸期の思想家の武士道論を示した。

井上の武士道論はその後「国体の本義」（37年）に取り入れられ^(注5)、さらに井上は、『戦陣訓本義』（41年）の序説で「武士道の系譜」を執筆し、42年に『武士道の本質』を出版するとともに『武士道全集』を編纂した。そして、こうした軍国主義日本の武士道精神が、その後、玉砕、自決、特攻という悲惨な結果につながっていった。

7. 新渡戸稲造と軍国主義

新渡戸自身はリベラリストであり、「武士道の本質は平和である」とも書いており、新渡戸の『武士道』は井上や軍国主義の武士道とは異なるものであった。とはいえ、新渡戸が広めた武

士道が日本の軍国主義に利用されたことは否定できない。

また、新渡戸の植民政策論や満州事変への対応も一部の論者から批判されてきた^(注 6)。新渡戸は『農業本論』で、「余輩は固より或る意味に於ける帝国主義、即ち暴力を逞しうして、弱肉強食の醜を演ずるが如き残忍酷烈なる主義は、決して之を望む者にあらず」と帝国主義に批判的であったが、その一方で「国力の伸長にして、経済発展の結果として起る以上は、……人類進歩の一端として、寧ろ嘉すべきものあるを見るなり」とも書いており、「植民」に対しても肯定的評価をしていた^(注 7)。新渡戸は 32 年に松山で行った講演で、「わが国を滅ぼすのは共産党と軍閥である、そのどちらが怖いかと問われたら、今では軍閥と答えねばならない。」と発言し、当時の軍部から攻撃されたが（松山事件）、その一方で、満州事変や日本の国際連盟脱退を弁護するような発言を行った。

8. 新渡戸稲造をどう評価するか

このように新渡戸稲造は影響力が大きかっただけに評価も批判も受けてきたが、その生涯を振り返ると、新渡戸が日本と世界の平和と繁栄を絶えず考え、日本人の人格形成のため懸命に努力したことは確かであり、近代日本にこうした人物が存在したことは幸いであったと思う。

農学に関しても、『農業本論』は非常に優れた著作であり、食料安全保障、農業の教育的価値、農業と環境の関係など今日でも通用する内容が含まれている。また、矢内原忠雄、南原繁という戦後の日本を方向づけた人物が新渡戸の強い影響を受け、戦後の民主主義、象徴天皇制、平和主義、女子教育の形成に大きく貢献した。

しかし、新渡戸の思想や言動に時代の制約があったことは否定できず、『武士道』も、単に肯定的に評価するだけではなく、軍国主義との関係も含め再検討する必要がある、植民思想に関しても、朝鮮半島、日中関係が揺れ動いている今日改めて研究する意義があるだろう^(注 8)。

(注 1) 新渡戸家は千葉氏にルーツを持つ南部藩士であり、曾祖父維民は兵法師範であったが、藩と対立して追放処分を受け、祖父傳は材木商を営んだあと三本木の開拓事業に取り組んだ。明治天皇がその三本木を訪問し開拓事業を称賛したことが、稲造が農学を志した動機になった。

(注 2) 横井時敬は農業技術者として出発し、ドイツ留学の後、農業経済学の著書も書いたが、共著であり内容も一般的なものであった。なお、横井は最晩年の 27 年に『小農に関する研究』を書き、農本主義者、小農論者と評価されてきたが、金沢夏樹は、横井は多面的に評価すべきだと主張した（『横井時敬と農業観』1976）。

(注 3) 桜井豊『経済再構成と農業基礎論』（1977）、小林政一『農政思想史の研究』（1984）、武田共治『日本農本主義の構造』（1999）、並松信久『近代日本の農業政策論』（2012）

(注 4) 津田左右吉「武士道の淵源に就て」（1901）、佐伯真一『戦場の精神史』（2004）、笠谷和比古『武士道』（2014）

(注 5) 「我が国民道徳の上に顕著なる特色を示すものとして、武士道を挙げるができる。……主従の間は恩義を出て結ばれながら、それが恩義を超えた没我の精神となり、死を視ること帰するが如きに至った。……生死一如の中に、よく忠の道を全うするのが我が武士道である。」（『国体の本義』）

(注 6) 飯沼二郎「新渡戸稲造は自由主義者か」（1981）、太田雄三『＜太平洋の橋＞としての新渡戸稲造』（1986）、浅田喬二「新渡戸稲造の植民論」（1988）。飯沼は、新渡戸の植民思想は、「植民は文明の伝播」という欧米の植民思想と「近代日本の侵略的大アジア主義」との結合であると指摘した（『新渡戸稲造と矢内原忠雄』1989）。

(注 7) 鶴見俊輔は、こうした新渡戸の二面性を「折衷主義」としてとした（『日本の折衷主義』1960）。北岡伸一「新渡戸稲造における帝国主義と国際主義」（2005）、小檜山ルイ「新渡戸稲造再考—「帝国主義者」の輪郭」（2009）、谷口真紀『太平洋の航海者』（2015）など、近年の新渡戸論もこの二面性を指摘している。

(注 8) 本稿では触れることができなかったが、新渡戸のマルクス、共産主義、天皇（皇室）に対する見解も興味深いものがある。新渡戸はマルクスを理論としては評価していたが、その実行については疑問視していた。また、天皇についても「天孫というのだから、他所から来られたに違いない」とし、神武天皇即位が 2600 年前だというのは間違いだと指摘しているが、生涯天皇を敬愛し皇室制度を支持していた。